

はじめに

「いい先生になりたい」

「もっと成長したい」

子どもたちへの思いが強ければ強いほど、空回りばかりしてしまう。

がんばりたい気持ちはあるのに、なかなか前に進めない。

誰かに相談したいけれど、そもそも相談していいことなのかわからない。

仕事の優先順位がつけられず、すべての仕事を同じ熱量でこなそうとして、疲弊してしまふ。

本書には、そんな不器用な「若手さん」が登場します。とても繊細で傷つきやすく、一人で考えすぎて空回りしてしまう性格です。どうにもうまくいかない自分が悔しくて、情けなくて、悲しくて、トイレでこっそりと泣いてしまいます。

読者のみなさんの目には、「ひ弱すぎる若手教員」だと映るかもしれませんが。

若手さんの一面を見て、もしかすると「ちょっとネガティブすぎない？」と感じる人も

いるでしょう。「いやいや、そういう若手さんなら、うちの学校にもいるよ」という人もいるかもしれませんが。あるいは、「そんなに苦しいんだったら、転職したらいいんじゃないの」と思われるかもしれません。

確かに、若手さんの心のなからは、不満や嘆き、愚痴でいっぱいです。しかし、けっして責任転嫁しようとする意図はなく、周囲に八つ当たりしたいわけでもありません。

自らネガティブになりたいと望む若手さんはいません。好んでトイレで泣いている人もいません。その裏には必ず原因があり、周りに迷惑をかけてしまうことへの不安と、若手さんなりの遠慮や気遣いがあります。どうかしたのにもうまくいなくて、若手さんは本当に困っている状態です。

この本を手にとってくださった方の中には、かつて、実際にトイレや更衣室でこっそりと泣いたことがある人もいるかもしれませんが。職場のトイレではないけれど、家に帰って涙が出たり、SNS上で愚痴や嘆きを吐き出したりした経験がある人もいることでしょう。

そこには、いろいろな困難があり、がんばりたくても力を出せない、人それぞれの悩みがあるはずです。そんな、教員なら誰でも一度は味わったことのある「つらさのエッセンス」

をかき集めたのが、本書に登場する「若手さん」なのです。

現在、全国の学校現場では、慢性的に教員が不足しています。「教員を志望する人が減っている」ことと、「休職や退職してしまう教員が増えている」ことのダブルパンチで、とても深刻な状況です。突然、現場から教員が去ってしまうと、残された教員一人一人の負担はますます大きくなり、子どもたちに悪い影響が及びます。ましてや、若手教員ばかり辞めてしまうのであれば、学校全体の活気も失われていくことでしょう。そうならないよう、学校にはさまざまな対応が求められます。

そこでキーマンとなるのが、本書に出てくる「ミドルさん」こと、ミドルリーダー層の中堅教員です。教職年数の少ない教員が多い学校であれば、20代であっても「ミドルさん」として、後輩の育成にあたっていることでしょう。そのようなミドルさんもまた、日々悩みながら、二人三脚で若手さんと共に成長しようと必死にもがいています。

私はこれまで12年間、公立学校の現場で働いてきました。

本書では、私がある間に接してきた若手教員との日常や、現場で見聞きしたこと、お世話になった先輩方の姿をもとに、「こんなミドルさんがいたら、みんながハッピーになれる

なあ」と思いながら、ミドルさんの傍で一人前に成長していく若手さんの物語を描きました。

たった一人だけでもいい。

この本をきっかけに、一人で苦しんでいる若手さんが救い出され、学校という場所が「誰一人取り残さない」温かい場所に近づくとしたら、どんなに素晴らしいだろう。

そんなことを思いながら、この「トイレの若手さん」に魂を吹き込みました。

今回、若手さんの悩みをマンガで表現してくださったのは、SNSで大人気の漫画家、すやすや子さんです。ページをめくるごとに若手さんが成長していく様子を、すやすや子さんのユーモア溢れるマンガとともにお楽しみください。

それでは、ページをめくって若手さんの物語をのぞいてみましょう。

令和5年8月吉日 前川 智美

## プロローグ

今日から新しい毎日が始まる。

「うわあ、桜がきれい！」

朝の空気を胸いっぱい吸い込みながら、これから始まる教員生活に思いを馳せる。

教師になりたいと思ったのは、いつの頃だったろう。

中学時代、恩師に出会って私の人生は変わった。

恩師がいなかったら、私は道を誤っていたかもしれない。

学校教育がなかったら、今の自分は存在しなかったと思う。

自分を育ててくれたのは学校だ。

「学校教育という営みに恩返しをしたい」

そんな思いで教育学部の門を叩き、ここまで歩んできた。自分が教師に向いているのかどうかは、正直わからない。ずっと自信がないまま今日まで来てしまった。

教師の現場は過酷だと聞く。

私に務まるだろうか。

人間関係は得意じゃない。

人前に立つのも苦手。

人より心配性で自信がない。

ユーモアがあるわけでもないし、これといった特技もない。

取り柄といたら真面目なことくらい…。

子どもたちはこんな私を「先生」と呼んでくれるのだろうか。

初任校はアットホームな学校らしい。

「うちにはいろんな年齢層の先生がいるから、初任者が働きやすい学校だと思うよ」

校長先生はそんなことを言っていたけど、ほんとかなあ。

地元の両親や友達は、私のことを応援してくれている。たとえどんな学校でも、ここまで来たらやるしかない。きつと大丈夫、何とかなる。

やるしかない。

とにかくスタートラインに立ってみよう。

そして、あとのことはやってみてから考えよう。

どんな子どもたちが待っているんだろう。

楽しみだなあ。

これからどんな物語が始まるんだろう。

ワクワクするなあ。

このドアを開けたら、新しい日々が待っているんだ。

ここから始まる私の人生。

さあ、行ってみよう。

# ドキドキの学級担任 初任なのに担任なんて！





## 若手さんの心の声

うわー、1年目から学級担任になっちゃった。

頑張りたい気持ちはあるけど、初任者に担任を任せるのはフツウのこと？この学校のことはまだよくわかっていないのに…。大学時代の先輩は、担任になって学級崩壊したって言ってたっけ。その後、確か病休に入っちゃったんだよね。自分に耐えられるだろうか。

子どもたちは新しいクラスの発表を楽しみにしているんだろなあ。自分みたいな初任者が担任だなんて、子どもにも保護者にも申し訳ない。

でも、くよくよしていても仕方ない。これも勉強だと思って頑張りってみるか…。

(3か月後)

担任になって3か月。毎日、つらいと思いつながらここまで来た。いまだに子どもたちとも馴染めていないし、どうすればいいのかもわからない。トラブル続出で精神的にも疲れた。副担任がうらやましいなあ。

これからも教員を続けていきたいけど、こんな調子で大丈夫かな…。

## ◆「横に立てる」伴走型の支援

初任で担任をもつのは、間違いなく大変です。なかには「担任をもつのが夢だったんです!」と公言するほど意欲的な初任者もいますが、多くの人は「自分に務まるのかな…」と不安に思っています。民間企業であれば、新人研修を受けてから現場に出るのが一般的です。それなのに、学校では初任者であっても、いきなり担任をもたされます。

ここで最初に必要なのは、「そうだよね」の共感と寄り添いです。「不安なんです」とつぶやいている若手さんに対して、間違っても「初任で担任をもつなんて、今じゃ当たり前だよ」「弱音なんて吐いている場合じゃなくて、やるしかないんだよ」などと言って突き放してしまわないようにしたいものです。

「そうだよね、初任で担任をもつのは不安だよね」

「学校のこともまだわからないのに大変だよね。みんな支えるからね」

まずは若手さんの立場に立ってみて、寄り添う姿勢を示すことが大切です。

これからの時代、教育現場で求められるのは、必要に応じて子どもの「横に立てる」伴走型の支援ができる教員です。

子どもが主体的に学び、「自律」できるようにするには、まずは教師である大人たち自身

が「自律」している必要があります。現場に出たばかりの初任者たちもそうです。将来的には「自律」した教員になれるように、ミドルさんをはじめとする周囲の先生方が、適切に支援していくことが必要なのです。

さらに、若手さんを支援することは、これからの学校づくりや子どもを支援する方法を学ぶ機会にもなるので、ミドルさん自身の成長にもつながります。

#### ◆キーワードは「一緒に」

初任で担任になった若手さんを救う言葉。それは、「一緒に頑張りよう！」の一言です。この言葉のよいところは、どの年代が使ってもそれぞれの温かみが伝わるという点です。

例えば、同世代の20代の先生から「一緒に頑張りよう！」と言われたらどうでしょう。

若手さんは「年齢も近そうだし、一緒に頑張りそうな気がしてきた」と親近感とやる気が湧いてきます。

では、30代のミドル層の先生から言われたらどうでしょう。「この先生を手本にしてしっかりといこう」と安心できるのではないでしょうか。

そして、40代以上のベテラン層の先生に言われたら、「こんなベテランの先生が『一緒に』

と言ってくれるなんてありがたい。わからないことは相談しながら頑張ってみよう」と勇気が湧いてくるはずですよ。

若手さんが最も恐れているのは、困ったときに孤立してしまうことです。だからこそ「一緒にやるから大丈夫だよ」というメッセージを届けることが本当に大切なのです。

◆自分のノウハウは惜しみなく伝授する

「困ったときは、私のやり方を全部真似していいよ！」

この一言があると、不安そうだった若手さんの顔が明るくなります。頼りがいのある先輩から「全部真似していいよ！」と言ってもらえると、若手さんは安心します。「この先輩と一緒に担任ができるなんて心強い!」「よかった…」と思ってもらえる瞬間です。私が過去にお世話になった先輩方も、「この人は一流だな」と思う人ほど、知識やノウハウを惜しみなく伝授してくれました。

ノウハウを教えてくれた先輩には恩返しをしたくなるものです。きっと、「先輩がこれだけ応援してくれているのだから、自分も頑張ろう!」「学んだことを生かして、自分も早く一人前になろう!」と、担任の仕事に対するモチベーションを上げてくれることでしょ。

## ◆「いち担任&amp;隣のクラスの副担任」になる

学級経営を成功させるためには、学年集団のチームワークが重要です。同じ学年に初めて担任をもつ若手さんがいたら、ミドルさんは若手さんのクラスの副担任になったような気持ちで気にかけていきたいものです。

一方で、「ミドルさん自身もいち担任」であることを忘れずに、若手さんに「担任としての背中」を示し、背中から学べる環境にしていけると理想的です。

「いち担任」でありながら、「隣のクラスの副担任」のつもりで、チームで若手さんを支えていくことが、ひいては学年経営の成功につながります。